

ベン カ
BIAN Ka



そよそよと、海に夕日を吹き落とす

映像、鉄(鑄造、切断、溶接)、ガラス

そよそよと、海に夕日を吹き落とす

『そよそよと、海に夕日を吹き落とす』という作品は、未来人の頭部にあたる液晶ディスプレイ映像を映し出し、人間と両生類の骨格を結合させた鉄のフレーム、植物と動物が調和したようなガラスの立体物、蛍光灯などから構成されるインスタレーションである。

人間は狡猾な生物であり、ますます悪化していく環境で生き残るために、生活様式から身体の構造に至るまで変容を余儀なくされた。進化論の逆方向に進化するか、両生類のように我々は、陸地や海洋、地下、他の惑星の環境に適応するのかもしれない。そこで、鉄板にスケッチを描き、金属の切断と溶接を駆使し、人工的な肉体を作り出した。同時に、私たちの生存環境は加速するように汚れていく一方だ。かつて見てきた海洋は、太陽の光の下で青く輝いていたが、大気汚染や霧などの問題により、次第に暗く不透明な色合いへと変貌している。鉄や透明なガラスなどの素材を用い、光を屈折させ、また透過や反射を制御することで、人の目に映るものを変えることを試み、現実であり仮想でもある空間に空の色や海の色を反射させるようにして生物体を染めた。その色は生物体自体にも宿るかのように見えるが、瞬く間に消えてしまう。

第三者の視点である AI に「人類がどう生きるのか」「環境と自身との関係がどのように変化するのか」について繰り返し問いかけ、それを現代詩としてまとめた。リアルな人間っぽい合成音声に未来人同士がお互いに詩を用いて、それぞれの視点や生活について語り合う。古代の中国では文言や詩を使って対話が行われていたが、現代では日常語やネット用語を用いて考えを表現している。各時代には固有の言語の論理が存在するが、未来においても、人間と知能の間の対話は言語のシステム上の障壁だけでなく、詩のような表現は理解しづらいかもかもしれない。AI の進化に伴い、デジタル時代における人間の立場を再定義し、私たちは技術の創造者からそれに依存する存在へと変化することになるのだろうか。

現代社会の環境は自然と都市だけでなく、インターネットの持続的な関わりなど、仮想世界が現実世界に不断に介入しており、その境界線は曖昧になり、私たちは自由にこれらの領域を行き来できるようになった。それは物理的な範囲だけではなく、可変的、仮想的な領域を交わせ、越境する可能性があるからだ。自然と都市、また現実と仮想の境界は何時も曖昧で、小さな探索衝動を誘発し、私たちの生理的および心の奥底に浸透し、認知と未知への旅をはじめさせ、すでに誰もが無視できない世界のなかに暮らしている。